

説教要旨 「天上の礼拝」

聖書：ヨハネの黙示録 4:1-11 讃美：『教会福音讃美歌』1 「聖なる 聖なる 聖なるかな」

3章で七つの教会への手紙が終わり、ヨハネは天の高みから「この後、必ず起こること」を見ることとなります。彼の前に「天に一つの開いた門」があつて(1)、「ここに上れ」という声が聞こえました(1)。ヨハネはここで天の視点を与えられ、これから起こる終末の壮大なドラマの一部始終を見ることとなります。もし天の視点が与えられなければ、彼はこれから見ることを理解することも、受け止めることもできなかつたでしょう。私たちの物の見方は、日常や身の回りの小さなことから世界情勢や世界経済の動向に至るまで、地上のことに縛られがちですが、信仰によらなければ見えない天上の現実があることを忘れてはなりません。

まずヨハネが見たのは、天にある御座と御座に着いているお方でした(2)。黙示録には「御座」ということばが多用されています。黙示録が書かれた当時、クリスチャンたちを迫害していたのは、ローマ皇帝の「御座」に着いていたドミティアヌス帝でした。しかし、本書が朗読されるのを聞いたクリスチャンたちは、ローマ皇帝の座よりもはるかに高い御座があることを覚えたことでしょう。地上の権力の座に目を奪われると、信仰は揺らぎ、平安も希望も失われ、愛も消えてしまいます。しかし、天の御座に心を向けると、愛と祝福をくださる神を覚えることができます。ヨハネは高貴な宝石や虹の輝きで、神の美しい威光を現しました(3)。

御座の周りには二十四人の長老が座っていました。黙示録には、多くの象徴的な数字がでてきます。それらの数字は、実際の数として意味を持つこともありますが、それよりも完全性や全体性を表わすために用いられる場合が多くあります。ここでの二十四という数は、イスラエルの十二部族と十二使徒を合わせた数であり(21:12-14参照)、ユダヤ人も異邦人も含むすべての信仰者を表わしていると考えられます。彼らは勝利を得る者に与えられる白い衣を着て(3:4-5、7:14)、冠をかぶっています(2:10、3:11)。御座の前に燃えている七つのともしびは、神の御霊を表わしています(1:4)。

ヨハネはそこに不思議な生き物を見ました。その生き物はケルビムの姿にも(エゼキエル10章)、セラフィムの姿にも似ていますが(イザヤ6章)、どちらとも異なっています。その生き物は、絶え間なく「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と讃美し続けています(8)。「聖なるかな」が三唱されることで、神の「聖」の完全性が表わされています。「聖」は神の最も大切な属性の一つで、汚れのない聖潔だけでなく、被造物との絶対的な差異と超越をも表わしています。神は、永遠に生きておられることにおいて(10)、創造者であることにおいて(11)、すべての被造物を超越したお方です。長老たちの讃美は「聖なるかな」の三唱とともに働いて、讃美の本質を現すものです。

ヨハネが4章で見たのは、やがて私たちもそこに加わる天上の礼拝と讃美でした。そこでヨハネは、礼拝と讃美の本質を垣間見ました。まことの権威、尊厳と威光は天の御座について居られるお方にあり、そのお方はまったく聖さをまとっておられます。二十四人の長老たちは、罪を赦されて、ただそこに「座って」おり(4)、御前に「ひれ伏して」「礼拝し」をしています。誤解を恐れずに言えば、それはリタージュの無いワーシップであると言えるでしょう。長老たちは、主からいただいた冠を投げ出して、ただ神のみが王の王、主の主であることを証しし、主を讃美して礼拝を捧げました(10)。私たちが地上で捧げる礼拝と讃美も、本質において、ここに立ちたいものです。